

句集 里着

酒本八重

いま剪らばしぶきとならむ花菖蒲

◎『里着』は『高麗郷』につづく八重さんの第二句集。
生まれ育った埼玉の比企丘陵に半生を委ね、
土臭い風土性のある句をしっかりと詠まれる方であるが、
掉尾を飾る花菖蒲の句にこそ、八重さんの感覚の
新しさの真髓があるように思えた。……………能村研三

しごく穂に豊の重さのありにけり

日のつまることに敏くて蚕飼の灯

一と鋤の深く入りたる野分あと

剥き痕のぐきぐき柿の干されたる

芋水車はじめは泥をとばしけり

もう一度数へ直して
糊筵

どの径を抜けても黄落の高麗郷

湯婆を袱紗包みにしてゐたり

パラボラアンテナ宇宙の淑気捉へたる

修験道すこしはづれて斧始

天上よりこぼれ来たりて囀れり

風の匂ひで野遊のすれちがふ

斑鳩の陽炎よりの出土なる

大和三山霞みて入江泰吉亡し

娘は

膝まるく坐りて授乳さくらの夜

蝶生れてブラウスの胸ゆるみがち

一子得て実家の朝寝をたのしめり

あり余る櫻ひとりで見てもりぬ

厩あと春蚊のこゑのしてゐたり

春惜しむには二重顎厚すぎし

宮林署霧の情報流しけり

合掌部落

鍬がしら鍋がしら老い夏越過ぐ

夏霧に削りてあをむ碑面かな

番屋より二た声三声良夜なる

寒
芹
に
摘
ま
る
る
震
へ
あ
り
に
け
り

秩
父
嶺
の
見
ゆ
る
場
所
よ
り
剪
定
す

初湯にて赤子うら返されてをり

出張帰りが雛市をのぞきけり

紙漉の仕上げ木の芽の匂ひせり

麦二寸雨脚とみに強まり来

助産婦へ顔みせにゆく櫻かな

喉に塗るくすりの辛き彼岸西風

へんろ寺胡麻炒る音のしてゐたり

新鮮な血が欲しと蛭田を泳ぐ

山眠り四五戸添ひ寝のかたちなり

神在の出雲より蕎麦とどきたり

高麗王の裔が年の火つかさどる

斧入れて冬木の精を呼び覚ます

寒餅や肚よりの声出して搗く

寒禽のひらりと翔てり取水口

花衣脱ぐ時佛間借りにけり

櫻能篝いよいよ膨らめり

花守の無聊へひとりふたり来る

山菜の毛深きものを摘みにけり

母に母ありしむかしの手毬唄

里人の会釈のよかり斑雪踏む

二月野はうすうす戻る父情とも

椿散る白鳳佛のうすごろも

朧
夜の幹
は地球
の柱め
く

合
格子父
と畑で
話しを
り

歌垣の山裾
蜥蜴いそぎをり

みどりさす阿修羅に息のかよふとき

吹割の滝の春風なりしかな

夏霧ふ碑の忽ちに師の面輪

小鳥来て里着といふはよかりけり

菖蒲守さうぶの水で手を洗ふ

いま剪らばしぶきとならむ花菖蒲

句集 ^{よたぎ}里着 〈本阿弥現代俳句シリーズIX〉

2005年4月20日 初版

定 価 本体2800円（税別）

著 者 酒本 八重

発行者 本阿弥秀雄

発行所 ^{ほんあみ}本阿弥書店

東京都千代田区猿樂町2-1-8 三恵ビル 〒101-0064

電話 03(3294)7068（代） 振替 00100-5-164430

印 刷 熊谷印刷 製 本 松栄堂製本所 (1924)

©Yae Sakamoto 2005 ISBN4-7768-0132-9